もうひとつの忠臣蔵

吉良上野介義央公の実像 ―其の一

西尾市文化財保護委員長
吉良公史跡保存会会長
颯田　洪

抹茶の生産高日本一といわれる西尾市の西野町地区は、茶畑が点在し、かつては、吉良氏の屋敷があった町です。

また、市内吉良町宮迫も茶畑に囲まれた山間の郷で、吉良上野介義央の領地でありました。

吉良といえば吉良上野介義央と思われますが、義央の祖先である「吉良氏」は、八〇〇年前の後鳥羽上皇が鎌倉幕府の討伐を図って敗れた「承久の乱」の後、三河の守護・吉良荘の地頭に任じられた足利義氏には、長氏、義継、泰氏の三人の男子がおり、足利本家は執権北条泰時の娘を母とする泰氏が継ぎ、長男といわれる長氏は吉良荘を継承します。そして、源家相伝の名刀「髭切」と白旗（源氏の標章）は長氏に授けられたといわれます。

長氏には満氏、国氏という男子があり、満氏は吉良氏を継ぎ、国氏は授かった地名から「今川」を名乗ることになります。

時は流れ、足利尊氏が鎌倉幕府に対して反逆するか迷った折、満氏の子の貞義に相談します。貞義は、「決意は誠に目出たい、むしろ遅いぐらいだ」と尊氏に決断させたほどの力を持っており、また貞義の頃からは吉良荘のほかに広大な浜松荘を支配し、七代義尚のときには室町幕府足利将軍家の御一家（御三家）として、その筆頭の地位にありました。

その後、戦国時代に入り三河国は今川氏と織田氏が攻め合う戦乱の地となりました。十三代義安は、今川領の薮田（藤枝市）に幽閉され、この地で亡くなります。義安の弟義昭が今川方の武将として東条城に配置されるなか、桶狭間の戦いで今川義元が討ち死にすると情勢は一変します。

義昭は松平元康（のちの徳川家康）との戦いで敗れ、鎌倉時代より約三四〇年続いた名門吉良氏は没落しました。

しかし、義安の子義定が吉良家を再興します。そして「吉良流礼法」を守り続けていたため、義定の子義弥のとき、江戸幕府の儀礼や典礼を司る「高家」に任じられます。

吉良家は義弥以降、義冬、義央と三代にわたり高家としての公務を日記に書き続けました。現在は、宮内庁書陵部に収められ「吉良家日記」とよばれています。

高家二代目義冬は幕府と朝廷との連絡役でした。幕府が一番気を使う朝廷との橋渡しをする役目であり、今日でいえば、外務事務次官と宮内庁要人を兼ねたような役ではなかったかと思われます。人望家といわれた義冬の長男が義央であります。

義央は、寛永十八年九月二日に義冬の嫡男として生まれました。母は、酒井忠吉の娘で、大老を務めた酒井忠勝の姪になります。

義央は十八歳のとき出羽国米沢藩主上杉定勝の娘三姫（のちの富子）を妻に迎えます。四千二百石の旗本が三十万石の名家上杉家の姫を迎えることは、外様大名上杉家と高家肝煎の吉良家を知る定勝の側室で三姫の生母生善院の働きがあったといわれています。これが上杉家との深い縁のはじまりです。

（つづく）

【江戸時代の吉良家】

義安
｜
義定
｜
義弥（高家1代目）
｜
義冬（高家2代目）
｜
義央（高家3代目）

上杉景勝
｜
定勝
｜
三姫（のちの富子）